

さくらんぼ

由本真菜

「絵を書くのとスポーツが大どくだい」  
と言った。

するとほしが、

「わたしは、絵を書くことと、スポーツが、大の苦手」  
と言った。

しばらくするとまたほしが、

「どう、あなたがとくいなことは、わたしが苦手でしょう。あなたがこれでも信じられないのなら仕方ないわ。あなたの苦手なことは何？」  
とまた聞いてきた。わたしは、

「勉強が大苦手」

と答えた。するとほしが、

「わたしは、勉強が大のとくだい。どう。これで信じたでしょう」  
と言った。わたしは思わず身を乗り出して、

「ほかにちがう所は、ある？」  
と聞いた。

ほしは、

「あなたは、身長がひくいけどわたしは高い。あなたは、かみが短いけどわたしは長い。あなたは、目がいいけどわたしは目がわるい。あなたは、右ききわたしは左きき。あなたは、お母さんに、わた

と言った。するとほしは、

「やっぱり」

と言った。そしてつづけて言った。

「年は、9さいと同じ。名前は、ほし↓しほで反対でしょ」  
と言った。わたしは、信じられなかった。

けれど、これがゆめじゃなく、げん実だということが分かってきた。

ただ名前がさかさまで年が同じなだけじゃないだろうか。  
わたしは、思いきって

「じゃあしほをみせなさい」  
と言った。

ほしは、

「分かったわ。しほを見せてあげる」  
と言ってから

「しほ。あなたは、何がとくだい？」  
と聞いてきた。

わたしは、

ある日、父、母、わたし（しほ9さい）でいっしょにさくらんぼがりへ行つた。

さくらんぼがりの所に着くとさつそく、さくらんぼをとってパクパク食べた。

わたしは、二つ実がついたさくらんぼを見つけた。その一つぶを「パクリ」

すると気が遠くなってしまった。

気がつくとも目の前に立っていた女の子が「あ、気がついた？」

と、言ってきた。

わたしは、

「うん。あなたは、だあれ？ここはどこ？」  
と、たずねてみた。すると、

「わたしの名前は、ほし。9さい。ここは、あべこべの世界。あなたの名前は、何？」

何さい？」

と、聞いてきた。

わたしは、「何でだろう？」と思つた。けれどわたしは、

「名前は、しほ。9さい」

しはお父さんに。などなど」

わたしは、「すごい。本物のあべこべの世界なんだ」と思った。

わたしは、ふと今、何時だろう、いつになったらもとの世界にもどれるのだろう。と思った。そしてほしに、

「ねえ、ほし！今、何時？いつになったらもとの世界にもどれるの？ねえほし！」

と聞いた。するとほしは、

「今は昼の12時。もとの世界にもどれるのは、あべこべの世界にどうして来てしまったのか理由を教えてください」

と言われてわたしは、思い出そうとしたけどなかなか思い出せない。

わたしは、ほしに、

「ねえ。ほし！何か手がかりない？」とたずねてみた。ほしは、しばらく考えてからこう言った。

「もとの世界のどこからあべこべの世界に来たの？」

と聞かれた。それを聞いたわたしは、思わず、

「あつーそういえば……」  
とさげんでしまった。

するとほしは、

「どうしたの？何か思い出したの？」と食いつくように言ってきた。

わたしは、

「うん。思い出した。さくらんぼがりに家族で行っていたんだ。そして二つ実がついたさくらんぼの一つを食べたら気が遠くなってそして気づいたらここにいたんだ！」

と言った。

するとほしがわたしに、

「ポケットを見てみなさい。きつとえだが、二つに分かれているけど実が一つしかついていないさくらんぼがあるはずよ」とさびしそうに言った。わたしは、ポケットの中に手をつっこんでたしかめてみた。すると本当にほしが言っていたとおりのえだが二つに分かれているけど一つだけしか実がついていないさくらんぼが！。

わたしは、ほしに聞いた。

「のこりのさくらんぼを食べたらもとの世界にもどれるんだよね？」

ほしは、

「うん。もちろんもどれるよ。そのかわり二度とあべこべの世界には、これないよ」

と言った。

わたしは、とてもかなしくなった。

もとの世界にもどれるのは、いいけど二度とあべこべの世界にこれないなんて。それに二度とほしと会えないなんて。するとほしが、

「ねえ。ほし。あべこべの世界に来た記念に二人で写真をとろう」  
と言ってくれた。

と言った。

わたしは、ほしのポラロイドカメラで記念写真をとった。

わたしは、ほしに、

「最初は、信じられなかったけどとっても、とーっても楽しかったよ。さようなら。ほし。バイバイ」

と言ってからわたしは、のこりのさくらんぼを「パクリ」するとまた気が遠くなった。

しばらくしてわたしは、気がついた。

そしてあたりを見回すとさくらんぼがりの所にいた。父と母は、まるでわたしがつつといたかのようににも気にしていない。

「わたしがぼんやりしていると母が、

「しほ、早く食べないと時間がきちゃう

わ。ほらこのさくらんぼあまいわよ」と言ってきた。わたしは、母がくれたさくらんぼを「パクリ」そして二つ実のついたさくらんぼの一つを「パクリ」食べてみたけど何もならなかった。わたしは、「ゆめだったのかな」とつぶやいた。

ふとポケットをさわってみると一まいの写真があった。その写真には、わたしとほしが写っていた。ゆめじゃなかったんだ！。

このふしぎな出来事は、いつまでたってもわすれない。